

ドライマウスと環境要因

佐藤 勉

日本歯科大学東京短期大学

ドライマウスは、主に唾液の分泌量が低下することにより、口腔内が乾いた状態になる歯科疾患の一つで、口腔乾燥症の別称である。近年、様々な形でドライマウスが取りあげられる機会は増えてきたが、その認知度は、眼科領域の疾患であるドライアイに比べると低いようである。しかし、わが国におけるドライマウス罹患者は800~1,000万人との報告もあり、潜在的な患者も多いと推測される。すなわち、「口の中がネバネバする」「痰がこびりつく」「口唇が乾く」という症状はドライマウスである可能性が高いが、これらを疾患と結び付けて考えている人は少ないと思われる。

唾液分泌量が低下する原因は様々で、加齢、ストレス、唾液腺障害、食生活、喫煙、全身疾患、薬剤服用などがあるが、その一方で、原因不明や因果関係が明確になっていないものも少なくない。例えば、唾液分泌と加齢との関連についても一致した結論は得られていない。しかし、超高齢社会におけるドライマウス患者の増加は、全身疾患を有する患者や薬剤服用者が増加することからも容易に推察できる。さらに、現代社会はストレス社会とも言われており、多種多様なストレスを

抱えている人も多く、こうした観点からもドライマウス患者は、今後も増加していくことが予想される。唾液分泌低下の原因となるストレスも、広義には環境要因として捉えられるが、食生活や喫煙などはまさしく環境要因であり、ドライマウスと環境との関連を考究することは重要である。ドライマウスは、齲蝕や歯周病のリスクを高めるだけでなく、飲食や会話など日常的な QOL の低下をもたらすことから、その原因解明はもちろんのこと、より適切な対処法や予防法の確立が望まれる。そこで、本学会のシンポジウムとして、「ドライマウスと環境要因」を企画した。シンポジウムの内容は、ドライマウスの基礎と臨床とし、そのメカニズムや疫学データ、および症例報告を中心に行った。本総説はシンポジウムにおける講演内容を基に、2名のシンポジストに執筆をお願いした。今号では、臨床の場でドライマウス治療にあたっている藤巻弘太郎先生に、ご自身の症例を中心に解説して頂いた。次号では、大学においてドライマウス研究に従事している宮坂孝弘先生の論文を掲載する予定である。